

近代

第13章 近代国家の展開 2.第一次世界大戦と日本 (2)政党内閣の成立

ほうあんでん
奉安殿の建設

奉安殿写真(鳥取県立鳥取西高等学校蔵)★



太鼓御門跡石垣★

第76回県史だより
(公文書館HPで公開しています)

解説

「奉安殿」とは、戦前の日本において、御真影と教育勅語を納めていた建物であり、主に学校に建設されていたものである。「御真影」は、敗戦まで官庁や学校に下賜された天皇・皇后両陛下の写真のことをいい、基本的に各学校が願い出、許可という手続きを経るようにし、複写が下賜されていた。1882(明治15)年頃からは、講堂や職員室・校長室内部にこれを納める奉安所が設けられていたが、校舎火災や地震などによる倒壊など、御真影が危険に晒されることもしばしば(鳥取一中〔現・鳥取西高〕においても1899(明治32)年に類焼した)で、次第に独立した奉安殿の建築が求められていった。

鳥取県は、1928(昭和3)年6月、各学校に御真影の拝戴願の提出を求め、これに合わせる形で県下の各学校は、校舎の外に奉安殿(または奉安庫)の建設を進めていく。10月、鳥取一中でも昭和天皇・皇后の御真影を奉迎し、体操場にて奉戴式を挙行了が、この時にはまだ奉安殿がなかったため、学校の翼賛団体である同窓会の主導で、御大典(天皇の即位を国内外に示す式典)の記念事業として建設されることとなった。本工事一切の設計は卒業生の秋田喜代治が担当し、広さ1坪6合(約3.6平方メートル)、高さが11尺2寸(約3.4メートル)で、10月18日着工、12月22日に竣工した。大正デモクラシーの潮流や協調外交進展の動きの裏で、内閣に「臨時教育会議」が設けられる(大正6～8年)など、「忠君愛国」の教育はむしろ強化されていく動きがあった。民衆の権利拡大を求める運動が高まろうとも、農村部や学校ではその風潮一色になったわけではなく、国家主義の教育体制は保たれていたのである。

(担当：前田孝行)

参考資料

- 『鳥城』第五十五号 鳥取県立鳥取第一中学校(1933年)
- 『鳥取西高百年史』鳥取西高百周年史編纂委員会(1973年)
- 『「消えた」奉安殿を追って』「第76回県史だより」鳥取県立公文書館(2012年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。